

指定番号：91 <sup>まえだとしつねこうはいづか</sup>前田利常公灰塚 種別：史跡

古府台地の中央部、標高16m代に位置し、万治元年（1658）に小松城で薨去した前田利常を茶毘に伏した地に、その遺灰を集めて造られた塚である。灰塚は、小松城本丸櫓から約5.8km東の地点に位置し、城の方角である西を正面としている。かつては「広大な地を擁して前後にお花杉の樹木を植え（五本杉ともいう）西方小松に面して長い参道」（註1）があったという。

灰塚の西辺部分の発掘調査と灰塚残存部の測量調査から、外周に堀を巡らせた一辺約30mの方形区画を形成し、堀内側に土塁を巡らせ、その中央に幅約15m、高さ1.5m以上の塚を築いていたことが判明した。また、幅約3m、地表から深さ約2mの堀が復元され、中央に幅4mの土橋を有していたことがわかっている。

本灰塚について「三壺聞書」には、「三宅野に火屋を立て垣を結廻し四門を立て白土にて上ぬり」とある。金沢市経王寺遺跡の事例から、史料に合致するような覆屋や垣根と考えられる遺構が塚造成前の基底部から検出されている。本灰塚にも史料に表現されるような茶毘所が先行してあった可能性が高い。

加賀前田家関係の灰塚については、利長墓所が灰塚を基に造営された可能性があるが、経王寺遺跡の灰塚は既に失われており、本灰塚と利常三男で大聖寺藩を分封した前田利治の灰塚のみが現存する。本灰塚は、過去の開発により現状改変されているが、地下に茶毘所などの遺構を留めている可能性があり、加賀藩主灰塚の遺存例として極めて重要である。

註1 『国府村史』 昭和31年9月25日 国府村役場

■ 所有・管理者：小松市



前田利常公灰塚全景

(石川県埋蔵文化財センター提供)